

保育実習が保育者効力感，自己評価に及ぼす影響

—— 実習評価を媒介した因果モデルの検討 ——

浜崎 隆 司*， 加藤 孝 士**， 寺 蘭 さおり***，
荒 木 美代子****， 岡 本 かおり*****，

(キーワード：保育者効力感，自己評価，実習評価，専門学校保育学生)

問題の所在と目的

乳幼児の減少や子育ての担い手として中心的役割を果たしてきた女性の高学歴化や社会進出によって，幼児教育に対する社会的ニーズの高まりが指摘されてきている（例えば，石川，2005）。そのような社会の要請を背景として，単に資格を与えるだけでなく，保育理念と目的意識，乳幼児の発達をふまえた保育技術など，保育者の資質向上が強く保育士養成校に求められている。

保育者養成校の学生が，幼児教育や保育の専門性を学習する場として実習がある。保育者養成校の学生を対象とした児嶋・高杉・高橋（2002）の保育観の変容に関する調査によると，保育学生は入学時，「子どもはかわいい」，「子どもが好き」と自分本位な志望動機のレベルから，実習を通して子どもとの関係の中で自らのかわり方を考えるようになることを示唆している。また岩井（2001）の保育者のイメージに関する調査によると，「実習を通して入学時のような安易なイメージでは勤まらない，とても責任のある仕事である」というイメージを形成していくようになることを示唆している。これらの結果から保育者養成校の学生にとって実習とは，これまで講義で学んだ理論を実践と結びつけながら自己の保育観を形成し，保育者となるための準備を育むプロセスと捉えることができる。したがって保育者養成校の学生に充実した実習を提供することは，今後の保育観の形成，さらには保育の資質の向上に繋がると考えられる。

保育士の資質を支える1つの要因として，保育者自身が自信を持って保育の活動を遂行できるかどうかの確信や信念が考えられる。Bandura（1977）は，自己の行為の信念として自己効力感（self-efficacy）を提唱している。自己効力感とは，「自らがある行動を遂行できる能力があるという自信」である。この自己効力感に影響を及ぼす情報源として，行為的情報（実際に自分でやってみることで得られる情報），代理的情報（他者の成功や失敗を見ることによって得られる情報），言語的説得（言葉による説得によって得られる情報），および生理的喚起（声の振るえ，赤面するといった生理的反応に関わる情報）の4種類を挙げている。このうち，教育実習は実際に幼児とのかかわりを通じて行為的情報を，他の実習生の幼児とのかかわりを見ることでの代理的行為情報を得ることが可能と考えられる。三木・桜井（1998）は，この概念を元に，保育者効力感（pre-school teacher-efficacy：PTF）を提唱している。これはAshton（1985）の教師効力感（teacher efficacy）を保育者あるいは保育専攻学生に適用させるために代用された概念で，「保育現場において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義されている。三木ら（1998）は，教育実習前と後で保育者効力感の変化を比較し，その結果，全般的に教育実習が保育者効力感を高めること，実習園と合致感が高い実習生が，低い実習生よりも保育者効力感が高まることを明らかにした。これは，教育実習での経験が，保育学生の保育者としての自信を高めるということを示すものである。

本研究では，保育者効力感の高低に影響を与える要因として，行為的情報にあたる，実習生個人の実習に対する評価に注目し保育者効力感に与える影響を検討する。保育者効力感とは，実習中の成功体験や充実感，満足感

*鳴門教育大学 幼年発達支援講座

**鳴門教育大学大学院 研究生

***愛知県立看護大学

****専門学校穴吹カレッジ

*****旭川荘専門学院

などはその向上につながり、失敗体験や失望感、不満などは減少につながることが考えられる。そこで、実習でのさまざまな経験をどのように評価する（実習での情報）かによって保育者効力感への影響が予想される。例えば、実習を振り返って、充実した内容であったと評価すれば、自分自身の保育能力に自信を持ち、実習後の保育者効力感は向上すると考えられる。したがって、本研究の主目的は、実習評価の尺度について検討し、実習経験のどのような内容が保育者効力感に影響しているかを共分散構造分析を用いて検討することである。

方 法

調査対象者 岡山県・徳島県の保育者養成の専門学校に通う学生122名から質問紙を回収し、欠損値を含んだ17名を除いた105名を対象に分析を行った。

調査期間 10月上旬

手続き 実習前調査は、実習を一週間後に控えた学生を対象に、フェイスシート、保育者効力感の回答を求めた。実習後の調査は、実習前に回答可能であった学生を対象に、保育者効力感尺度、実習評価の回答を求めた。質問紙は、実習前、後の調査とも学級担任により、配布回収を行った。調査に際しては、強制でないこと、調査以外の目的で使用しないことを質問紙に明記し、了承された学生に対して回答を求めた。

内容

フェイスシート 実習前は、年齢・性別・学年・学籍番号を記入してもらい、実習後は、学生番号のみを記入してもらった。

保育者効力感尺度 本研究では、西山(2005)の作成した「人間関係」保育者効力感尺度を使用する。西山(2005)は、現役保育者と保育者志望学生を対象に、子どもとの人間関係に主眼をおいた保育者効力感尺度を作成している。その結果、最終的に12項目を採用し、信頼性、妥当性も十分な値を得ている。本尺度は、5件法（5. 非常にそう思う～1. ほとんどそう思わない）で回答を求めた。得点が高いほど、保育者効力感が高いことを意味している。質問項目の詳細は表1に示した。

表1 保育者効力感尺度の質問項目

1	私は、子どもの自発性や主体性を尊重した遊びによる保育実践をできると思う
2	私は、子どもが友達との関係の中で、自己主張や自己抑制を学びとっていけるような保育ができると思う
3	私は、子どもとの愛情ある温かい人間関係を保育の中で実現できると思う
4	私は、子どもの人間関係の育ちによって一人一人の発達課題に即した援助ができると思う
5	私は、子どもが様々な人と触れ合いながら人間関係を広げていけるよう援助ができると思う
*6	私は、園生活の中で、必要な道徳性を身につけるように保育することは難しいと思う
7	私は、子どもが安心感をもてるように保育ができると思う
8	私は、子どもが自分を好きで、自信がもてるような保育が出来ると思う
9	私は、子どもの人間関係の広がりを考慮したクラス編成や保育形態を実践できると思う
10	私は、子どもの共同のものを大切に、譲り合って遊べるように指導や援助ができると思う
11	私は、子ども同士のコミュニケーション能力を育む保育を実践できると思う
12	私は、保育の展開と人間関係の育ちを結び付けてとらえることができると思う

*は逆転項目

実習評価 保育実習の評価を行っている研究（清水，1998；森，2003）の項目を参考に、保育者養成大学の発達心理学を専門とする教員1名と、保育者養成の専門学校教員1名、幼児教育を専攻する大学院生2名によって、実習評価の18項目を選定した。実習評価は、実習における様々な側面を把握するため、「実習園での振舞い」、「実習園での心得」、「実習への積極性」、「実習ノート」、「保育技術の工夫」、「実習の感想」の6種類の実習側面を評価することを意図した計18項目で構成された。本尺度も5件法（5. 非常によく当てはまる～1. 全く当てはまらない）で回答を求めた。得点が高いほど実習評価が高いことを意味している。

結果と考察

保育者効力感尺度の検討 まず、本研究で使用した保育者効力感尺度の信頼性を検討するため、実習前、後の保育者効力感尺度の α 係数を算出した。結果、実習前では.91で、実習後も.91であったため、十分な信頼性を保持していることが示された。

次に、実習前と後の保育者効力感の差を検討するため、対応ある t 検定を用いた。その結果、有意差が見られ($t(104)=2.35, p<.05$)、実習後の保育者効力感得点($M=3.20, SD=0.53$)は、実習前の保育者効力感得点($M=3.09, SD=0.55$)に比べ得点が高いことが示された(図1)。この結果は、山沢(1993)や三木・桜井(1998)の結果を支持するものであった。すなわち、保育実習は保育専攻専門学生の保育者効力感を高める方向に作用したと考えられる。ただ、桜井(1992)で指摘されたように、実習後のほうが保育者効力感が低下するという結果もあり、実習が必ずしも保育者効力感を高める要因として作用するとは結論づけられない。というのは、桜井(1992)では、保育者効力感の調査が入学直後に行われており、この時期の学生は、保育者になることへの高い期待感によって、実習前にもかかわらず保育者効力感が高いということが考えられるからである。つまり、自己の保育に対する客観的評価というよりは、期待感や憧れ感による自己効力感が高まり、実習によって現実自己の保育能力が認識され、保育者効力感が低下するという考え方である。このような、事前の高い効力感に対して、中村(2006)は、保育者に対する憧れが含まれた効力感として「夢見る効力感」と表現している。一方、本研究で対象となった保育学生は2年生で一部の学生は、授業での指導や保育実習とは異なるものの施設等の実習経験もあり、保育実習前にある程度実習の大変さは予期しており、現実に即した保育者効力感が査定されたのではないかと考えられる。

実習評価の検討 実習評価項目18項目に主因子分析による因子分析を行った結果、固有値は7.01, 1.59, 1.36, 1.28, 1.08, 0.83, …と推移した。ここでは、4因子と5因子間の固有値に変化量が前後に比べ大きいため、4因子構造を想定してプロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった5項目を分析から除外し、再度同一方法で因子分析を行った。結果、表2に示すような因子パターンが得られた。

第1因子では、「実習ノートの表現に注意した」「保育について工夫することがあった」など、保育能力に関係する項目が高い負荷量を示したため、「保育者スキル」因子と命名した。第2因子では「先生方や子どもに対する言葉遣いに気をつけた」「明るく振舞いように気をつけた」など、実習態度に関係する項目が高い負荷量を示したため「実習態度」因子と命名した。第3因子では「これはなぜなんだろう等と疑問を持った」「色々なことを質問したといった」といった項目が高い負荷量を示したため「保育への好奇心(以下好奇心)」因子と命名した。第4因子では「今回の実習で学んできたことに満足している」「保育実習での経験は、将来の生活や職業に役立つと感じる」といった項目が高い負荷量を示したため「実習充実感(以下充実感)」と命名した。

以上の因子分析の結果に基づいて、「保育者スキル」「実習態度」「好奇心」「実習充実感」の下位尺度からなる実習評価の指標を作成した。各尺度の内的整合性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、保育者スキル(.82)、実習態度(.81)、好奇心(.62)、実習充実感(.70)と十分な値を示した。

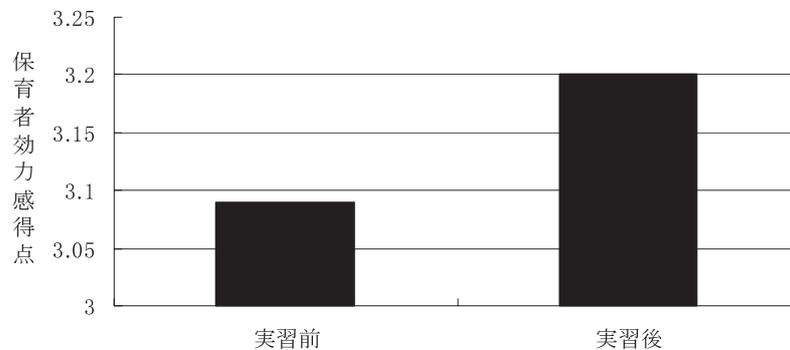


図1 実習前後の保育者効力感得点

表2 実習評価の因子分析の結果（プロマックス法）

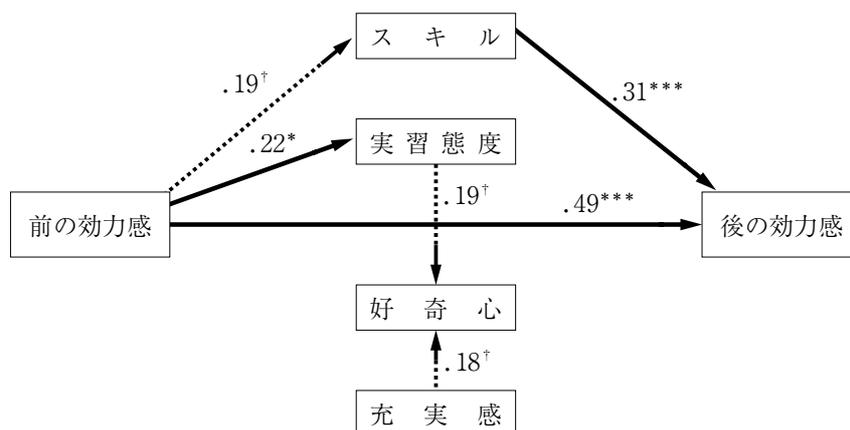
項 目	I	II	III	IV
保育者スキル (α=.82)				
実習ノートの表現に注意をした	.84	.03	-.03	-.03
実習ノートをきれいに整理するように気をつけた	.82	-.05	-.11	.08
保育について工夫することがあった	.81	-.20	.09	-.02
遊びなど、子どもの指導の時間に色々と気を遣った	.58	.11	.14	.05
食事やお昼寝など、子どもの養護の時間にいろいろと気を遣った	.57	.29	.09	-.04
実習態度 (α=.81)				
先生方や子どもに対する言葉遣いに気をつけた	-.13	.91	-.06	.07
先生方や子どもに対する挨拶に気をつけた	-.14	.83	.20	.05
明るく振舞うように気をつけた	.07	.74	.17	.01
先生方や他の人に合わせて行動するように気をつけた	.21	.68	-.29	-.15
保育への好奇心 (α=.62)				
これはなぜなんだろうと疑問を持った	-.04	.03	.84	-.12
色々なことを質問した	.14	-.01	.77	.09
実習充実感 (α=.70)				
今回の実習で学んできたことに満足している	-.02	-.11	.12	.91
保育実習での経験は、将来の生活や職業に役立つと感じる	.06	.16	-.22	.82
因子間相関	I	II	III	IV
II	.50	—		
III	.37	.40	—	
IV	.29	.26	.33	—

実習前の保育者効力が実習における自己評価、実習後の保育者効感に与える影響

表3 実習前後の保育者効力感と実習評価の相関係数

	後効力	スキル	気づかい	好奇心	充実感
前効力	.56***	.18†	.22*	.19†	.14
後効力	—	.42***	.38***	.19*	.23*

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$



*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

図2 共分散構造分析の結果

まず、各因子得点の相関係数を算出した（表3）。次に実習前の保育者効力感、実習評価、実習後の保育者効力感の因果モデルを検討するために、共分散構造分析を行った（Amos, 5.0）。モデル作成の手順は、時間的に先行している実習前の保育者から実習評価、及び実習後の保育者効力感へのパスを想定した。また、実習評価は実習後の保育者効力感を評定する前の出来事であるため、実習評価から実習後の保育者効力感への影響も想定できる。そのため、実習評価から実習後の保育者効力感へのパスも設定した。その後修正指数によって、モデルの修正を行った。豊田（1998）の説明を基にモデルの適合度を見ると、.90以上が採用基準である GFI は.99と高

い値を示し、また AGFI も .98 と高い値を示した。更に、.10 以下の値を採用基準とする RMSEA は .01 と十分な値を示した。また、.90 以上が採用基準である CFI も .99 と高い値を示した。したがって、本モデルは十分な適合度を有していることが示された。

そして分析の結果、図 2 の様相が明らかとなった（有意なパスのみ記載）。具体的には、実習前の保育者効力感は、実習中の保育スキルや実習態度に影響を与えることが示された。実習前の効力感の高さは、実習時における保育にかかわるスキルの向上に影響を与え、それがまた後の保育者効力感を高める要因になっていることが示唆される。また、事前の保育者効力感の水準は直接事後の保育者効力感の水準に影響していることも明らかになった。また、実習中の保育スキルは実習後の保育者効力感に影響を与えていることが示された。保育スキルには、実習ノートの整理や表現にかかわる表現スキルと実践の場での子どもとの指導やかかわり方の実践スキルが含まれる。そのようなスキルの行使によって得られる成功・失敗体験は、結果的には自己の効力感を高める作用をもたらすと考えられる。

更に、実習態度は、保育への好奇心に影響を与えていることが明らかとなった。先生や子どもへの対人関係の配慮は、保育への関心を高めることを示唆するものである。さらに、実習充実感も保育への好奇心へ影響を与えていた。実習中に得た充実感や満足感は、さらなる保育への関心を高めると解釈される。

ただ、実習態度、保育への好奇心、実習充実感、直接、事後の保育者効力感への影響が見られず、保育スキルのみはその影響がみられた。これは、保育実習における、充実感や対人関係よりも、自分の保育がうまくいっているのかいないのかという自己の保育行動への関心の高さが保育者効力感に強く影響することを示唆するものである。岩井（2001）は、保育実習を経た短期大学生保育者のイメージ等に関する調査の中で、保育実習中は、子どもへの関心よりも、自分の評価に関心があることを指摘している。本研究での、保育者効力感尺度には、保育技術に関する内容も多く含まれている。自らの保育を工夫するなどして、実習中に成功場面を多く経験する場合には、効力感が高まり、一方、失敗経験が多い場合には、効力感は低下するのではないだろうか。

今後、保育学生の保育者効力感の質的変容についても検討の必要であろう。いわゆる、憧れの効力感から現実への効力感への変容過程である。多くの学生は、子どもが好きで早くから保育者を志望した学生が、授業や実習を経て、予想したよりも保育者は大変な仕事であると感じている。そこでは、岩井（2001）も指摘するように、保育者としての問題点に対応策もなく、克服するあてもなく、ただ頑張る、努力するなどといって肩肘張っているだけの学生が存在する。そこで、個々の保育者効力感が、実習評価や教員の指導等を通して、憧れの効力感から次第に現実に即した形で修正していくための支援のあり方が必要である。

また、保育者効力感を高めることの意義についての検討も必要であろう。例えば、齋藤（2000）は、保育者効力と保育士の働きがいの関連について検討している。その結果、保育現場において保育者の働きがいを向上させる効果があることを示唆している。これは、賃金や職場環境の改善とは違って、指導等の介入により向上を促しうる可能性を示唆するもので、保育士の早期離職に歯止めをかける上で有効な手段となりうるであろう。

引用文献

- Ashton, P.T. 1985 Motivation and the teacher's sense of efficacy. In Ames, C. and Ames, R. (Eds) *Research on Motivation in Education*. Academic Press.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 石川隆行 2003 保育者を目指す短大生の保育者効力感について. 一宮女子短期大学研究報告, 42, 315-322.
- 石川隆行 2005 女子短大生の保育者効力感について. 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 635.
- 岩井勇児 2001 保育科学生の保育者観の形成 (続報). 名古屋柳城短期大学研究紀要, 23, 183-194.
- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究, 46, 203-211.
- 森 知子 2003 保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連 — 保育者養成校における実習教育プログラムをとおして —. 関西学院大学臨床教育心理学研究, 29, 31-41.
- 中村多見 2006 保育学生の保育観(1) — 保育者効力感の発達 —. 高松大学紀要, 45, 197-206.
- 西山 修 2005 幼児の人と関わる力を育むための保育者効力感尺度の開発. 乳幼児教育学研究, 14, 101-108.
- 齋藤友介 2000 保育士の働きがいに及ぼす保育者効力感の影響. 保育学研究, 38, 162-168.

- 桜井茂男 1992 教育学部生の教師効力感と学習理由. 奈良教育大学教育研究所紀要, 28, 91-101.
- 清水益治 1998 保育学生における実習の評価に対する意識. 日本教育心理学会総会発表論文集, 40, 794-795.
- 豊田秀樹 1998 共分散構造分析入門編 — 構造方程式モデリング —. 朝倉書店.
- 山沢正仁 1993 教育学部生の教師効力感と教師イメージに与える教育実習の影響. *NIIGATA Educational Psychologist*, 10, 52-53.

Effect of Practice Preschool Teaching on Self-Evaluation and Pre-School Teacher-Efficacy : An Examination of a Causal Model with Evaluation of Practice Teaching as an Intervening Variable

HAMAZAKI Takashi*, KATOH Takashi**, TERAZONO Saori***,
ARAKI Miyoko**** and OKAMOTO Kaori*****

(Keyword : pre-school teacher-efficacy, self-evaluation, evaluation of practice teaching, Technical school students of preschool education)

This study examined the causal model of self-efficacy as a preschool teacher before practice preschool teaching, evaluation of practice teaching after practice preschool teaching, and pre-school teacher-efficacy : after practice preschool teaching. A questionnaire survey was conducted on 122 subjects who were female technical college students in preschool education training. The results before and after practice teaching were compared. Self-efficacy was found to have increased after practice teaching. Factor analysis was performed on the evaluation criteria of practice teaching. As a result, the following 4 factors were extracted : “skills as a preschool teacher,” “attitude toward practice teaching,” “curiosity,” and “feeling of fulfillment in practice teaching.” The causal model was examined with evaluation of practice teaching as an intervening variable. As a result, self-efficacy before practice teaching affected the “skills as a preschool teacher” and “attitude toward practice teaching” during practice teaching. The “skills as a preschool teacher” during practice teaching affected the self-efficacy after practice teaching. In addition, “attitude toward practice teaching” and “feeling of fulfillment in practice teaching” affected “curiosity.”

*Department of Early Childhood Education, Care, and Welfare, Naruto University of Education

**Graduate School of Education, Naruto University of Education

***Aichi Prefectural College of Nursing

****Technical School of Anabuki College

*****Asahigawasou Medical Welfare Academy School